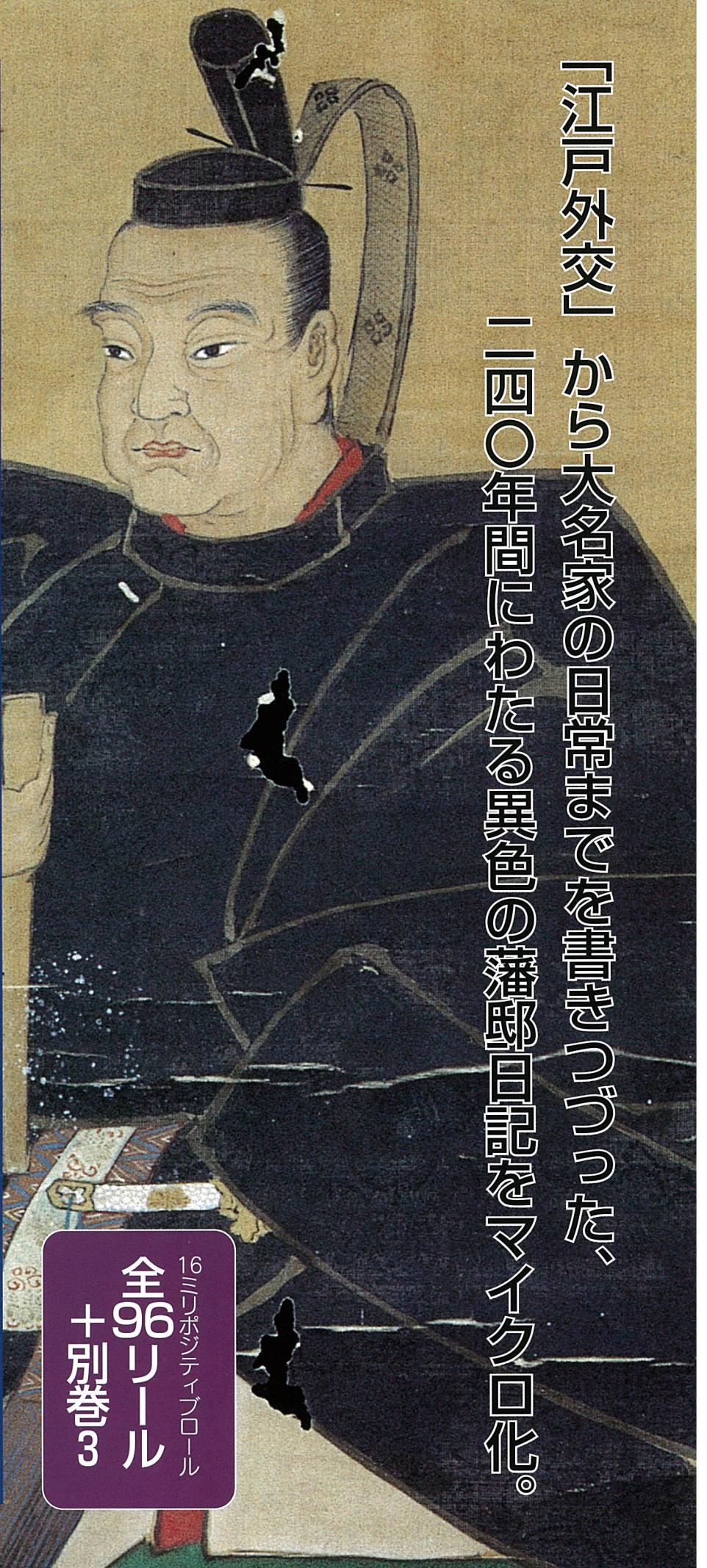


「江戸外交」から大名家の日常生活を書きつづった、

一四〇年間にわたる異色の藩邸日記をマイクロ化。



# 江戸藩邸毎日記

対馬宗家文書

●第Ⅱ期●

監修 田代和生

慶應義塾大学教授

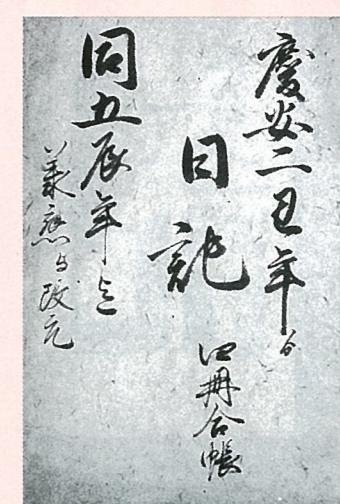
ゆまに書房

全96リール  
+別巻3  
16ミリポジティブルーレ

# 監修のことば



田代 和生  
慶應義塾大学教授



対馬藩宗家の文書は、内容が国際色に富み、かつその量が総点数、十数万点といわれるほど厖大なことで知られている。とくに宗家の行ついた朝鮮国との外交や貿易が、対馬を「鎖国」時代にあつても東アジア国際社会に開かれた窓口のひとつにした。ところが藩政時代が終わると、これらの特徴が裏目に出た。たとえば戦前は、日本の朝鮮半島における植民地政策のもと、六万点以上の宗家文書が朝鮮総督府によつて買い上げられ、海外に流出してしまつた。また国内に残る宗家文書も、一所でまとめて保管することができず、最近判明した分を加えると、東京だけで五カ所、対馬を合わせると合計六カ所に分割される原因になつた。もともと宗家文書は、対馬藩邸・朝鮮釜山の倭館・江戸の対馬藩邸でつけられ、伝えられてきたものである。記録類は長い年月とともに互いに出入りを繰り返し、他所の写しや控などが作成され、別所に移されたものも多い。このため、宗家文書のいずれもが相互に関連したものであることはいうまでもない。

貴重な宗家文書の存在は、日本のみならず、海外にも知られるようになつた。とくに最近は、韓国の歴史学者が宗家文書に注目し、日本の古文書にとり組んでおられる。そうした方々のためにも、いつかこれらの文書が整理され、ひとところで見られるようになつて欲しい。それが、この研究にたずさわってきた者が一様に抱く、積年の「夢」であった。

この入手困難な一級史料を、手もとににおいて縦横に活用できるよう、このほど東京に保管されている宗家文書から、順次マイクロフィルム化という形で刊行に踏み切ることになった。それも、慶應義塾図書館本は通信使記録、東京大学史料編纂所本は江戸藩邸記録、国立国会図書館本は倭館記録と、それぞれの保管所の核となる記録を選び、さらに欠本となつてゐる部分については、韓国国史編纂委員会や東京国立博物館、長崎県立対馬歴史民俗資料館のご協力を得て補充出版を企画するなど、できるだけ完全なシリーズ本の復元をめざしている。

宗家文書は、アジアの隣国と最も友好的な時代を築いたかつての日本の姿を、あますことなく語ってくれる。それは単なる歴史の一象ではなく、二十一世紀の国際社会を生きるわれわれにとって、学ぶべき現代的課題である。できるだけ広く、内外の多くの方々がこの文書に接することができるよう、いまここにマイクロフィルム版『対馬宗家文書』を世に送り出す次第である。

## 待望の史料群を手許に

### 新しき日韓関係に寄与する学問の糧

### 現代的意義を評価

### 有用な史料の公刊を喜ぶ



田中 健夫  
東京大学名誉教授



李 元淳  
前大韓民國國史編纂委員會委員長  
ソウル大學校名譽教授



須之部 量三  
元韓國駐在日本大使



松尾 美恵子  
学習院女子大学教授

対馬藩宗家の史料は、江戸時代の大名家の史料のなかできわめて多彩で豊富な内容をもつており、しかもよく整備されている。とくに対馬藩が朝鮮との交流に独占的にたずさわってきた関係から、その厖大な史料群は日朝関係を解明するためには不可欠のものとして注目されてきた。ただ宗家史料は、明治以後さまざまな経緯を経て分散し、現在は韓国国史編纂委員会・対馬歴史民俗資料館・東京大学史料編纂所・国立国会図書館・慶應義塾大学等に所蔵され、少数の研究者以外には十分に利用研究されることがなかつた。今回、多年日朝関係史を専攻してきた慶應義塾大学の田代和生教授が監修して、これ等に東京国立博物館所蔵の史料等を加え、テーマごとにマイクロフィルムに収録するという。これからは、韓国にゆかねば調査できなかつたような、閲覧に不便だった貴重な史料を、手許において見ることができるのである。積年の渴望をいやす壯舉であり、福音である。日韓両国の研究者による縦横の活用とその研究成果を期待したい。

近世日韓関係史において、対馬はユニークな歴史的役割を占めていました。そ

のため、対馬藩の記録である宗家文書は日韓交流史研究の基本史料として学問的に注目されてきました。ところが、現在、宗家記録は対馬藩の本舞台である対馬と江戸藩邸があつた東京のいくつかの古文書関係機関とともに、我が韓国歴史史料機関である国史編纂委員会等、日本韓両国のかつての機関に分散秘蔵されているので、研究者の利用が至難で何らかの方法で研究の便がはかられる様熱望されました。たゞ宗家史料は、明治以後さまざま

な経緯を経て分散し、現在は韓国国史編纂委員会・対馬歴史民俗資料館・東京大学史料編纂所・国立国会図書館・慶應義塾大学等に所蔵され、少数の研究者以外には十分に利用研究されることがなかつた。今回、多年日朝関係史を専攻してきました。と云えましょう。この史料が公刊される事によって日韓交流史研究が促進される事を信じ、又、新しき時代の日韓関係創造に寄与し得る学問の糧になると思料し、同社の勇断に敬意を表しながら敢えて推薦する次第であります。

近世日韓関係史において、対馬はユニークな歴史的役割を占めていました。そ

のため、対馬藩の記録である宗家文書は日韓交流史研究の基本史料として学問的に注目されてきました。ところが、現

在、宗家記録は対馬藩の本舞台である対

馬と江戸藩邸があつた東京のいくつかの古文書関係機関とともに、我が韓国歴史史料機関である国史編纂委員会等、日本韓両国のかつての機関に分散秘蔵されているので、研究者の利用が至難で何らかの方法で研究の便がはかられる様熱望されました。たゞ宗家史料は、明治以後さまざま

な経緯を経て分散し、現在は韓国国史編纂委員会・対馬歴史民俗資料館・東京大学史料編纂所・国立国会図書館・慶應義塾大学等に所蔵され、少数の研究者以外には十分に利用研究されることがなかつた。今回、多年日朝関係史を専攻してきました。と云えましょう。この史料が公刊される事によって日韓交流史研究が促進される事を信じ、又、新しき時代の日韓関係創造に寄与し得る学問の糧になると思料し、同社の勇断に敬意を表しながら敢えて推薦する次第であります。

近世日韓関係史において、対馬はユニークな歴史的役割を占めていました。そ

のため、対馬藩の記録である宗家文書は日韓交流史研究の基本史料として学問的に注目されてきました。ところが、現

在、宗家記録は対馬藩の本舞台である

# 対馬宗家文書 第II期 江戸藩邸毎日記

## リール配分一覧

\*原本は全て東京大学史料編纂所所蔵。  
\*各期ごとのリール数は重複して数えています。

■第一回配本				
配本	年 代	原本冊数	リール数	
全32リール	寛永～明暦期	7	1	
	万治・寛文期	27	5	
	延宝期	15	4	
	天和期	10	2	
	貞享期	11	2	
	元禄期	36	10	
	宝永期	25	7	
	正徳期	16	4	
				30～32

■第二回配本			
配本	年 代	原本冊数	リール数
全31リール	享保期	56	13
	元文期	15	3
	寛保期	9	3
	延享期	9	3
	寛延期	8	2
	宝暦期	23	3
	明和期	21	3
	安永期	15	2
	天明期	19	2
	慶応期	4	1

総コマ数  
約112,000

■第三回配本				
配本	年 代	原本冊数	リール数	リール番号
全33リール	寛政期	34	6	64～69
	享和期	9	2	70・71
	文化期	12	2	72
	文政期	27	6	73～78
	天保期	25	6	79～84
	弘化期	10	3	85～87
	嘉永期	19	4	88～90
	安政期	14	3	91～93
	万延期	3	1	94
	文久期	8	3	
	元治期	2	1	95～96
	慶応期	4	1	



■『江戸藩邸毎日記』の原題の表紙。

江戸初期から幕末期まで、長いスケールで書き継がれた日記は、藩政内部のことなどまらない。日朝外交・貿易などをめぐる幕府との交渉、幕閣や諸大名・公家衆・寺社方などと交換された書状の写し、朝鮮渡来を含む贈答品、江戸町方のことなど、政治史・法制史・文化史・美術史・対外関係史・経済史等、近世史全般にわたる一級史料である。

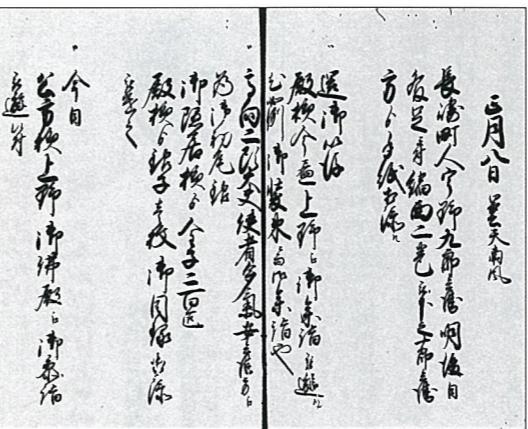
## 近世史料の一大宝庫

# 特色と内容

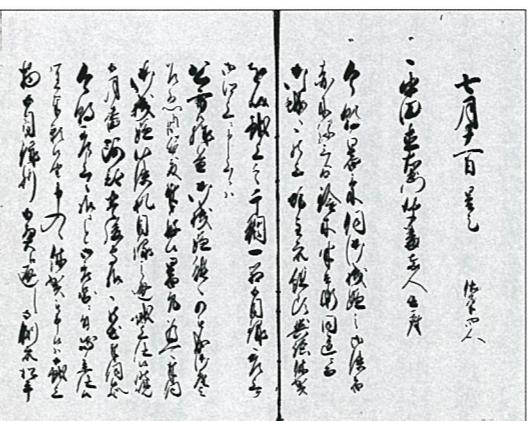
※掲載の写真史料はすべて東京大学史料編纂所所蔵。



■第1リール収録史料。



■対馬藩の黄金時代といわれる宗義真(天龍院)の時代の『毎日記』。  
(上)元禄一(二六八九)年七月十一日の条。/(下)元禄六(二六九三)年正月二十二日の条。

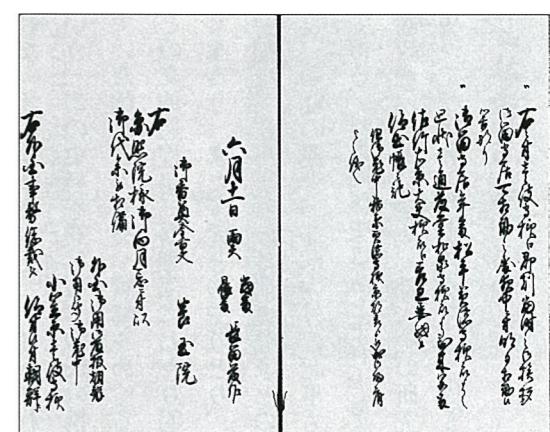


## 三百年間の日朝「交隣」 関係の実態を活写

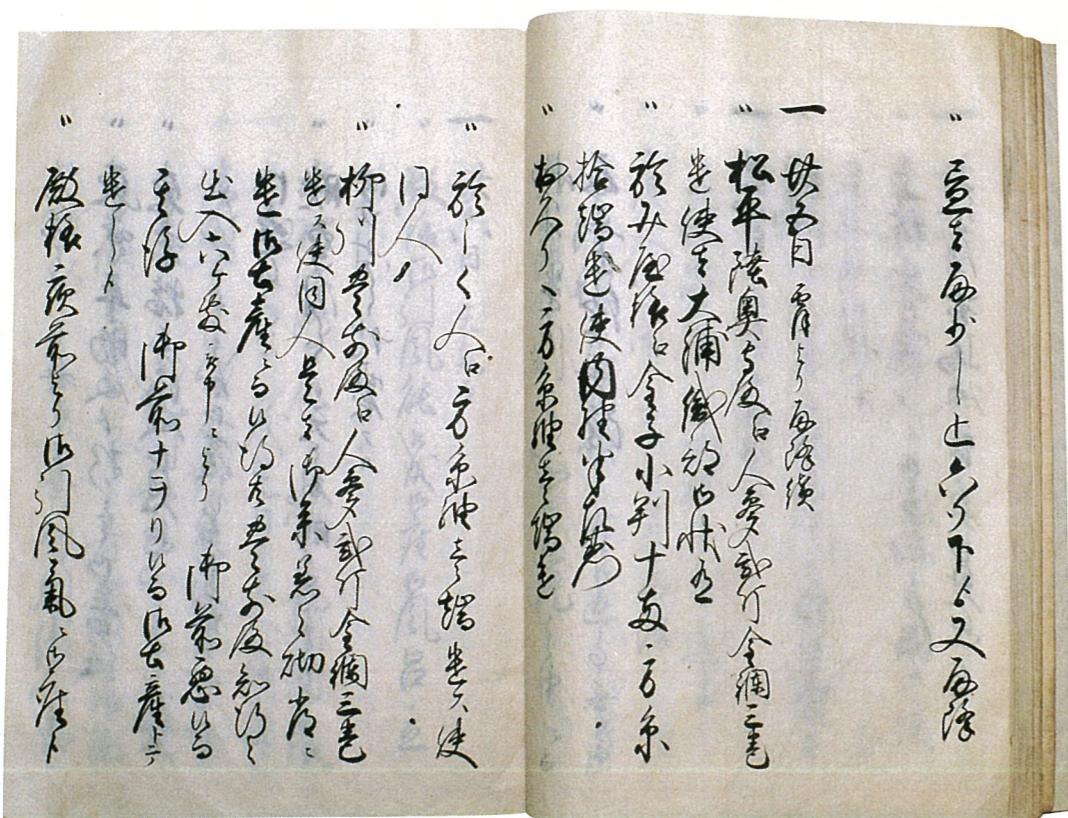
朝鮮通信使の来日交渉、日朝外交の実務推進、倭館貿易で利潤を得て成り立った対馬藩財政の実態を示す史料。藩政の中核部である表書札方が書きあげた『毎日記』は通信使記録や倭館記録を再度検証する重要な史料である。

11万コマ・22万頁以上に及ぶ厖大な史料をコンパクトに、かつ廉価に提供できるよう16ミリマイクロフィルムにて刊行。35ミリの2倍のコマ数が収録できるため、容積も1/4となり、収納スペースもとりません。また、見たい史料をすばやく引き出せる自動検索可能なカセット(国立国会図書館・国立公文書館等採用)への転換も承ります。ご希望の方は、ご注文の際お申し付け下さい(詳細につきましては、弊社営業部までご相談下さい)。

## 厖大な史料を コンパクトに収録



■幕末期の『毎日記』慶応3(1867)年6月10日・11日の条。



■寛永五(二六一八)年正月二十五日の条。  
記事が多い。

## ● 対馬宗家文書の由来と保管所の変遷

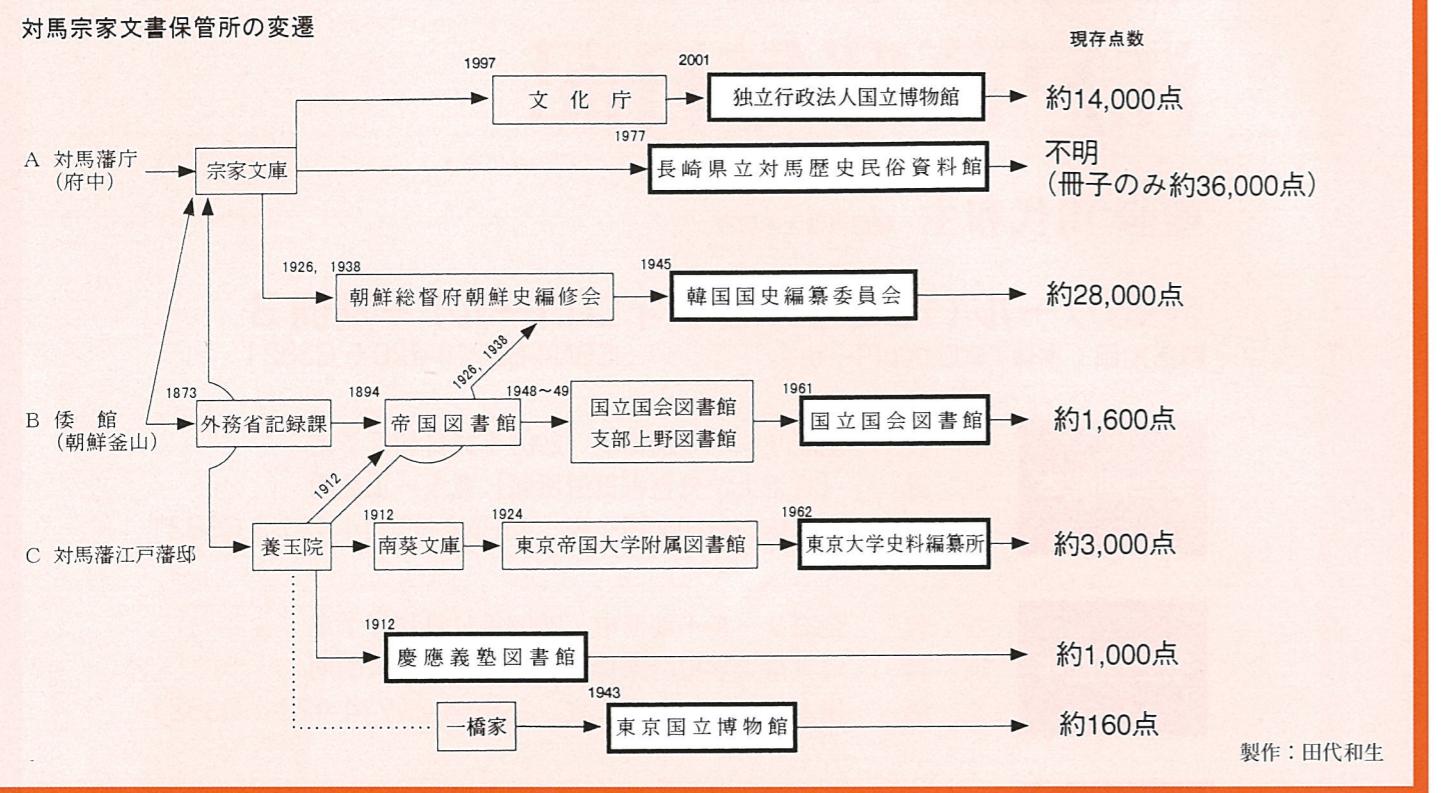


対馬藩宗家に伝わる古記録・古文書の類は、江戸時代の諸大名のなかでも、質・量ともに特筆すべきものがある。いわゆる「鎖国」といわれる時代、日本は朝鮮国と対する等な外交関係を樹立している。

対馬藩に一任しており、この関係にかかる煩雑な実務を実務をおこなった釜山の倭館において、記録の作成と保管を義務づけていた。かくして総点数、数十万といわれる厖大な記録類が誕生したのである。

「宗家文書」は、おもに①対馬藩、②倭館、③江戸藩邸の三ヵ所で保管がなされていた。もとより、対馬藩という一つの藩政機構に属したものであるから、その内容は対朝鮮関係にかかるものだけでなく、領内治政あるいは幕府や諸大名との関係記録も多く含まれている。長い間に記録類は互いに出入りを繰り返し、また他所で記録・保存されていたものの写しや控の類が作成され、別所に置かれるようになつたものも多い。やがて近代にいたり、左の図のような経路をへて、現在は七つの機関に保管されている。

今回、マイクロ化される江戸藩邸毎日記は、東京大学史料編纂所に伝わる「宗家文書」の中心部分をなしている。



■対馬藩歴代藩主一覧（『寛政重修諸家譜』『対馬叢書 第1集宗氏家譜略』ほかによる）

諱	受領名・官名	通称	法号	生没年月日	藩主就任期	備考
義智	対馬守	彦二	萬松院	永禄十一年（1568）	天正十六年十二月（1588）	将盛の子
義成	対馬守	彦七	光雲院	元和元年正月（1615）	元和元年正月（1615）	初名昭景
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛永十六年十一月十八日（1639）	元和五年六月二十日（1619）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄九年正月十九日（1666）	義眞の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄九年正月十五日（1668）	初名義龍
義智	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄九年正月二十日（1668）	義智の子
義成	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄九年正月二十日（1668）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七	光雲院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義智の子
義成	対馬守	彦七	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義成の子
義眞	対馬守	彦満	天龍院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義倫	対馬守	右京大夫	右京	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義倫の子
義眞	対馬守	彦七	萬松院	寛文十一年三月二十六日（1671）	元禄十五年八月七日（1682）	義眞の子
義智	対馬守	彦七</td				

対馬宗家文書 ●第Ⅱ期●

# 江戸藩邸毎日記

監修:田代和生 慶應義塾大学教授

全96リール(16ミリポジティブルロール)+別冊3

■ 汎定価:本体4,500,000円十税

ISBN4-89714-420-5 C3821

## 第1回配本

卷 数 全32リール十別冊上 2001年11月刊行予定  
収 錄 【東京大学史料編纂所所蔵】寛永～正徳期  
定 価 汎本体1,500,000円十税 ISBN4-89714-421-3 C3821

## 第2回配本

卷 数 全31リール十別冊中 2002年11月刊行予定  
収 錄 【東京大学史料編纂所所蔵】享保～天明期  
定 価 汎本体1,500,000円十税 ISBN4-89714-422-1 C3821

## 第3回配本

卷 数 全33リール十別冊下 2003年11月刊行予定  
収 錄 【東京大学史料編纂所所蔵】寛政～慶応期  
定 価 汎本体1,500,000円十税 ISBN4-89714-423-X C3821

※分売をご希望の方は小社営業部までご相談下さい。

※詳細は未定ですが、欠本分を長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵分によって補完することも検討中です。

## 対馬宗家文書

〔第Ⅰ期〕朝鮮通信使記録 好評発売中

- 卷数:16ミリポジティブルロール137リール
- 原本所蔵機関:慶應義塾図書館ほか
- 汎定価:本体5,934,000円十税

〔第Ⅲ期〕倭館守日記・裁判記録 2005年刊行予定

- 卷数:16ミリポジティブルロール約120リール
- 原本所蔵機関:国立国会図書館ほか
- 予価:本体4,500,000円十税

## 特にお薦めしたい方

日本近世史、社会経済史、朝鮮史、日朝関係史、東アジア史、外交史、比較文化史、思想・文学・美術・音楽など各種の文化史、情報・交通史、政治史などの研究者および研究機関。図書館。政府関係団体。

## ゆまに書房

〒101-0047  
東京都千代田区内神田2-7-6  
TEL 0352960491  
FAX 0352960493  
<http://www.yumani.co.jp>

●総発売元

株式会社 紀伊國屋書店

営業總本部